

鳴門教育大学 教職大学院に学ぶ

現在、将来にわたり、求められる教員像を探求しつつ、教育成果の検証を重ねながら、専門職業人としての教員を養成すること。それが鳴門教育大学・教職大学院のミッションです。

》理論がないと勢いだけでは行き詰まる

かつて、情報教育の専門家が土井さんの実践を見て言われた「理論がないと勢いだけでは行き詰まる」という言葉は土井さんの腑に落ちるものでした。これまでの自分の実践を振り返るとき、うまくいかなかったときには、いろんな変数があるから難しい、仕方がないと弁解する反面、場当たりのなところを改善して、理論に基づく手法を基礎から学び直さなくてはいけないという思いがありました。

また、それを実践して見せてくれた同僚にも影響を受けました。その人は、今年同じように東みよし町教



土井 国春 先生
高度学校教育実践専攻
教職実践力高度化コース修了

CASE 9 : ICT教育の架け橋に

育委員会から鳴門教育大学教職大学院に派遣された先輩教員です。その人の授業や学級経営の実践には、生徒指導の3機能である「自己決定の場」、「自己存在感」、「共感的人間関係」の育成という理論が通底していました。つまり、私も理論と実践の往還を目指すために、鳴門教育大学教職大学院に入学したのですと、丁寧に謙虚に語ってくれた土井さんでした。

》いろんな人がいてこそ価値がある

教職大学院では、オリエンテーションの時から、驚きの毎日でしたと、土井さんは続けます。

教員は専門家ともいべきスペシャリストではなく、広範な分野の知識・技術・経験をもつゼネラリストであると言われつつも、現職学生の中にはあらゆる分野に才気煥発するスペシャリストがいて、触発されました。



このような状況で、はじめは緊張して、自分の思いを披瀝することはありませんでした。チーム総合演習の授業で、時と場所と機会の共有により、このメンバーなら自分の思いを受けとめてくれ、共感してもらえると確信がもてるようになったとき、積極的に話ができるようになりました。現場での失敗やミドルリーダーとして少し先の自分の展望について話すことができるようになったのです。仲間との関わりの中で、スペシャリストばかりでなく、いろんな人がいてこそ楽しく価値

がある。多軸で多面的にものごとを捉える楽しさが生まれると思うようになりました。

》 人と ICT をつなぐ

ある意味非日常である教職大学院の学生生活で得たダイアログ*の経験を日常の学校生活で児童に汎用することができるだろうか。実習では、土井さん自身が得た実感をプログラミング教育の中で展開すること

土井先生の研究概要

情報活用能力の育成

思考スキルの習得

Research

これまでの置籍校での実践や研究紀要の分析、先生方とのディスカッションなどから、置籍校における児童の情報活用能力の実態を把握することに努めた。情報の収集や情報の表現などの学習活動では、情報の特性に応じてICTを使い分けるなど、児童の情報活用能力は高い。一方、集めた情報を主体的に分類、整理するなどの学習活動には、改善の余地があると、成果と課題を確認した。



タブレットPCを活用している学習場面

Plan

「情報を整理する学習活動」を、算数科における情報活用能力を育成する主要な学習活動と位置づけ、学習活動を体系的に整理した。算数科における「情報を整理する学習活動」では、「比較する」「変化をとらえる」「関係づける」などの思考スキルが多く用いられると予想されるため、それらスキルの明示的、継続的指導も並行して行うこととした。

	3年	4年	5年	6年
情報を整理する学習活動と関連する思考スキル（一部抜粋）	<p>棒グラフをよむ</p> <p>①(3) 資料を分類整理し、棒グラフを用いて状況がやすく表しなされることにより、情報を調べたりすることができるようになる。</p> <p>棒グラフの読み方を理解し、表れた棒の長さを読み取る。</p> <p>好きな職業×2コース調べなど、身近なことから調べ、調査を行い、棒グラフに表して考察する。</p>	<p>折れ線グラフ</p> <p>①(4) 目的に応じて資料を集めて分類整理し、折れ線グラフを用いて状況がやすく表しなされることにより、情報を調べたりすることができるようになる。</p> <p>折れ線グラフの構成要素を知り、データから表れた線や傾斜、傾向を読み取る。</p> <p>気温や体温などのデータを折れ線グラフに表し、考察する。</p>	<p>円グラフ、帯グラフをよむ</p> <p>①(4) 目的に応じて資料を集めて分類整理し、円グラフや帯グラフを用いて表しなされることにより、情報を調べたりすることができるようになる。</p> <p>割合を表すグラフについて理解し、円グラフ・帯グラフから割合を読み取る。</p> <p>資料から情報を集めて、円グラフや帯グラフに表し、考察する。</p>	<p>ヒストグラム</p> <p>①(4) 資料の平均や範囲を調べ、統計的に考察したり整理したりすることができるようになる。</p> <p>度数分布表やヒストグラム、分組について知り、ヒストグラムを読み取る内容を読み取る。</p> <p>資料から情報を集めて、ヒストグラムを画し、考察する。</p>
情報整理する学習活動	比較する	変化をとらえる	比較する	比較する
	関係づける	関係づける	変化する	関係づける
	分類する	変化する		

にしました。新学習指導要領では小学校でもプログラミング教育を行うことになりました。その中で、コンピュータへの命令の手順を体験的に理解し、論理的に考える力を育てることが求められています。

プログラミングの授業では、ペアでの活動することにより、操作面での不安な要素を取り除き、わからないことをお互いに相談し助け合いながら活動に取り組みます。そして、みんなで共有化します。教室では「どうやったの」という質問や「こうしたらいいと思うよ」という様々な視点からの助言が相互に行われます。「見て！見て！見て！」という承認を求める言葉も教室に溢れます。

プログラミングを通して、人と関わり、自分が習得したことを他者に伝え、人に認めてもらう体験があると、子供たちは授業を楽しみにするようになります。そのためには、教材の体系化を図り、学習活動を熟考することも肝要だと話してくれました。

また、飛び込みの授業は、初めて出会う児童を新鮮な目で見つめることで、クラス全体を俯瞰できること

を再確認しました。現場に帰っても、バイアスをかけないで常に新鮮なまなざしで児童を素直に見つめることを忘れないようにしたいと言う土井さんです。

》 学びを次世代の教師に伝える

土井さんの板書の美しさは、教職大学院の学生の間でも評判です。土井さんはチョーク1本でもすばらしい授業を展開することができますが、若い学生にそれだけを説いても無理があります。今後は、時の流れも考慮してICTを使ったものを若い世代に伝え、情報活用能力を育てていきたいそうです。土井さんの流れるようなICT物語はこれからも子供たちに、若手教師に語りつがれ、ICT教育の架け橋となることでしょう。

*ダイアログ（対話）：本学の山下一夫学長が、授業の中で、学生生活の中で何より大切にしてもらいたいのが語り合うことです。お互いが無知であることを自覚し対等な関係のもと、勝ち負けを競うのではなく、ともに真理を探究しようとするものです。

小学校算数科における情報と整理する学習活動の体系化

Do

第4学年「折れ線グラフ」で授業を実践した。「変化をとらえる」という視点があることで、折れ線グラフを単なる点のプロットの集まりとしてみるのではなく、各区間の変化、全体の傾向などを丁寧に読み取ることができた。また、「比較する」「関係づける」ことを通して、スケールが変わるとグラフの印象が変わることに気づき、判断や解釈に気を付けることの大切さも学ぶことができた。



折れ線グラフの板書

Check・Action

情報活用能力と思考スキルの相関を分析した。算数科で育成を目指す情報活用能力と、「比較する」「変化をとらえる」「関係づける」などの思考スキルに相関がみられた。置籍校の子どもたちが、変化の激しい社会をたくましく主体的に生き抜いていくことができるよう、日常的、継続的に情報活用能力の育成を推進していく。



主体的・対話的に学び合う子どもたち

Recurrent Education



学びをハーモニーに

小崎 朱代さん

〔阿波市立土成中学校 指導教諭〕

教職大学院での2年間の学びは、教員としての自分自身を省察する大変有意義な時間でした。講義や演習を通して組織的取り組みを実践していくチームワークに必要な理論や手法を学ぶことにより、多面的にとらえる力や俯瞰する力を鍛えることができました。

大学院修了後は、地元の阿波市立土成中学校に赴任し、本年度は指導教諭として、学年主任兼研修主任の職務に臨んでいます。本年度は研究テーマを「表現力の育成」とし、ミニ研修（希望研修）を取り入れ、ユニバーサルデザインや道徳教育など、先生方が気軽に参加できる研修体制づくりを進めています。また昨年度は、前任校の市教委が主催する人間力向上研修において、大学院で研究した「ユニバーサルデザインの視点を活かした授業づくりと環境づくり」を若い先生方に紹介し、共に研修を深めることができました。大学院での学びを現場で活かせることに喜びとやりがいを感じています。

今後も大学院での学びをさらに深め、そして広げ、ハーモニーのように響かせていける教員を目指して、日々精進していきたいと考えています。

(平成26年度7期教職実践力高度化コース修了)



学びの姿勢を変える価値

土岐 浩司さん

〔香川県教育委員会義務教育課 生徒指導グループ 指導主事〕

教職大学院の2年間を振り返って言えるのは、自身の「当たり前」に対する捉え方が変容したということです。大学院入学までは、中学校教員としてもっていた「当たり前」の感覚を変えていくことに不安がありました。自分のやり方に固執してしまう部分もあったかと思えます。

教職大学院では、自分がこれまで知っておきたくても十分学習する機会がなかった分野についても深く学ぶことができました。また、大学院の先生方には、講義や演習でのご指導だけでなく、折に触れて重要なお助言や心温まるお言葉をいただき、「当たり前」の認識が変わっていくことに価値を見出すことができるようになっていきました。今までとはまた違った角度から「学校」というものを俯瞰できるようになったのではないかと思えます。

現在、私は香川県教育委員会義務教育課で勤務しています。教育行政の仕事は、これまでの仕事内容と大きく異なりますが、かつての「当たり前」の認識にこだわることなく、新たな価値付けができるようになりたいと思っています。

(平成27年度8期教職実践力高度化コース修了)



学校改善に生かす

坪井 保人さん

〔静岡県立池新田高等学校 教諭〕

子どもの意識と行動の構造に着目した大学院での実践研究が、学校改善につながっていると実感しています。学校現場では、生徒の行動面に現れる現象のみに着目した指導に陥りやすい傾向がありますが、内面の状況を丁寧に見取り、育てたい生徒像を学年教員で確認しながら向き合うようにしています。すべての生徒の成長可能性を否定せず、生徒の良い面を価値づけ、勇気づける実践を重ねています。友達のよさを認め合う活動、行事で活躍した生徒を称賛する活動、自分の成長を振り返る活動、悲観的な考え方を低減させるための活動、自分の身の回りに起こったよいことを発表し合う活動、成長を価値づける面談の実施、テスト前の自主的な学習会（質問会）の実施など、自分への信頼を高めることにつながる活動をいたるところで仕掛けています。

このような取組が、生徒及び教員の変容を促し、学年の枠を超えて学校全体に広がりつつあると感じているところです。今まさに、大学院で学んだ理論と、実践研究で培ったマネジメント力やリーダーシップを発揮している自分がいます。大学院を修了して2年以上経過しましたが、大学院での学びが現在の自分を支えていることは間違いなく、今後もさらに成長したいと思っています。

(平成25年度6期教職実践力高度化コース修了)

～学び続ける修了生～



学び続けることの大切さ

西森 一彰さん

〔高知県心の教育センター 指導主事〕

私は大学院修了後、高知県教育委員会の教育相談機関に勤務しています。そこでの相談活動や研修会で講師を担当する際の拠り所となっているのが、大学院での学びと出会いだと感じています。

大学院では、カウンセリングや児童生徒理解などについての理論的な学びと、心理相談室で子どもや保護者の面接を担当するといった、実践を通しての学びがありました。面接場面で関わらせていただいた方々から、目に見える言動だけでなくその背景をみることの大切さや、子どもたちや保護者の思いに寄り添うことの大切さを教えていただきました。

現在の職務では、その大学院での学びや出会いを活かすことができ、やりがいを感じる反面、悩むことや壁にぶつかることも多々あります。そのような時、大学院のときの資料やノートを見返したり、恩師からスーパーバイズをいただいたりしながら乗り越えています。そして、学び続けることの大切さを日々実感しています。

今後も、微力ながら子どもたちや保護者、学校への支援を通して、本県教育の発展・充実に努めていきたいと思っています。

(平成20年度1期学校臨床実践コース修了)



学びの土台

馬越 博之さん

〔四国中央市立川之江北中学校 生徒指導主事〕

中学校の教員として14年が過ぎたころ、自分の経験を頼りに取り組んできた生徒指導や生徒理解で行き詰り感が大きくなり、もう一度自分を見つめ直し、学び直そうと考えたことが、教職大学院を志望したきっかけでした。

教職大学院では、多様な校種のの人たちと出会い、自分の悩みについて相談したり、新しい取組について協議したりすることで、考えを深めることができました。また、「子どもの内面理解」や「教育相談の技法と実践」等の講義や演習を通して、理論やデータに基づいた実践の重要性について学ぶことができました。

大学院修了後は、現任校に異動し、生徒指導主事として新たなスタートを切りました。学校現場に戻った今、大学院在学中に取り組んだテーマ「中学校における不登校生徒に対する支援体制の充実をめざして」の実践経験が役立つとともに、仲間づくりや安心できる居場所づくりの取組、教職員の協働性を高めるワークショップ型研修等、様々な場面において大学院での学びが生きていると実感しています。

教職大学院での学びを自分の土台として教育実践力を高め、生徒や保護者、教職員を支えていける存在になれるようこれからも学び続けていきたいと思っています。

(平成25年度6期教職実践力高度化コース修了)



問い続ける力

猪尻 マサヨさん

〔鈴鹿市教育委員会事務局教育指導課 指導グループ 副主幹兼指導主事〕

教職大学院での生活は、時間に流されていた自分を立ち止まらせることができ、貴重なときとなりました。一生懸命になっているときこそ立ち止まる習慣がついたのは、教職大学院での影響が大きいと思います。また、「一人の限界」を実感できたのも教職大学院でした。率直な意見を伝え合うこと、多様な考えを受け入れ、何度も思考を繰り返すことで、新たな世界が広がることを知りました。

教職大学院修了後、2年間置籍校に戻れたことで、それまでとは異なる現場の見方をしている自分に気付きました。自分に何ができるのかということを一人的枠ではなく組織として考えること、そして、今の状況を過去と未来とのつながりの中で見て、数年後の状況を考えて今を選択するという思考を得たことが大きな変化だと思います。

今年度から鈴鹿市教育委員会事務局に異動し、より広い視野が必要となりました。教職大学院で学んだことを基に、広く深く教育を捉えられるよう自己研鑽していきたいと思います。

(平成25年度6期教職実践力高度化コース修了)

「教員、人間としての器をより一層大きくする！」

教える自信と学ぶ謙虚さを育てる鳴教の教職大学院へ

教師力UP

頼れる、頼られる先生は、実践を省察し、学び続ける意欲を持ち続けているものです。より高い“教師力”を身に付けることをめざすなら、理論と実践の融合が特長の教職大学院が最適です。

学校力UP

指導教員は学生と共に勤務校を訪ね、1年次の学校課題アセスメント、2年次のフィールドワークを通じて課題解決を目指します。在学中も、勤務校にとって、大きなサポートが得られるのです。

地域力UP

教職大学院が目指すのは、リーダー教員の育成です。勤務校はもとより、地域の教育界に資する、学校や地域で指導力を発揮できる人材を育成するには、教職大学院を活用ください。



鳴門教育大学教職大学院への期待

東みよし町教育委員会 教育長 川原 良正

本年、開設10年目を迎えられた鳴門教育大学教職大学院には、東みよし町からも、多くの意欲ある教員を派遣してきました。みな、それぞれの問題意識を研究に結実させ、修了後は学校現場でより専門性や質の高い教育活動を実践しています。この変化の激しい時代に、幅広い課題について体系的に学ぶことができ、教師力のアップを図る場が確保されていることは、教員や教育関係者にとって大変貴重であ

ると考えます。一方、学校教育に求められることは、年々増加の一途をたどっており、教員が余裕をもって子ども達に向き合う時間が奪われているという現実もあります。今後は、マンパワーへの依存に傾きがちな学校運営を、組織力強化による学校改革へと進化させてゆける、すなわち「チーム学校」実現の柱となりうる人材を多数輩出されることを期待しています。



教職大学院からの風

東みよし町立足代小学校長 角瀬 公子
(平成28・29年度実習時)

「土井先生は、4月より鳴門教育大学教職大学院で、2年間さらに研究を深められます」修了式で子供達に伝えたことが思い出されます。教員が教職大学院で学ぶ意義は、専門知識の深化、指導力・実践力の向上等、多々ありますが、それ以外にも2つの側面があるのではないのでしょうか。

1つ目は、所属校に新しい風を送ってくれることです。教職大学院で学んだことを職員室で

話題にする。そのアカデミックな雰囲気が教職員への刺激になり、私達の新たな学びにつながる可能性を秘めています。

2つ目は、子供達に与える良い影響です。一人の大人としての教員が学び続ける姿勢を目の当たりにする。それにより、生涯学び続けることの大切さが子供達の心に沁み渡り、いつまでも残る大きな財産になるに違いないと考えています。

◆お問い合わせ

鳴門教育大学 教職大学院コラボレーションオフィス

電話：088-687-6598 ファクシミリ：088-687-6694 E-Mail：collabo@naruto-u.ac.jp

鳴門教育大学ホームページ <http://www.naruto-u.ac.jp/>